参考２

平成31年1月31日

崎山　比早子　殿
島薗　進　殿
瀬川　嘉之　殿
濱岡　豊　殿
満田　夏花　殿
吉田　由布子　殿

日本学術会議会長・幹事会

平成 30 年 10 月 22 日付けの貴返信について、以下のとおり回答します。

1　「報告　子どもの放射線被ばくの影響と今後の課題－現在の科学的知見を福島で生かすために－」についてなされた質問に対して、日本学術会議は平成 30 年８月 20 日付けの回答（以下「回答」という。）をお伝えしました。これに対する同年 10 月 22 日付けの貴返信は、以下の２つがその内容となっていると理解しています。

① 子どもの放射線被ばくの影響と今後の課題について、広く学際的な視点で長期的に審議を重ねていく場を設置すること。
② 回答した個別の事項に対する反論。

2　既に回答でお伝えしたとおり、放射線防護・リスクマネジメント分科会（以下「分科会」という。）では、子どもの放射線被ばくの影響と今後の課題というテーマは、科学的にも社会的にも大変扱いが難しい問題であるため、まずは分科会での審議結果を「報告」（平成 29 年９月１日公表）にまとめ、これをベースに多くの方と議論し、双方向性コミュニケーションを担う保健医療関係者に向けた提言を第 24 期において検討するという段階的な意見集約を計画しています。

幹事会としては、本件テーマが高度に専門的であり、かつ分科会が提言に向けた検討を進めていることから、分科会において学術的議論が落ち着いてなされるよう、分科会とは別に新たな委員会を並行的に設置することは考えていません。

なお、分科会は公開で行われており、開催日は日本学術会議のホームページに掲載されていることを申し添えます。

3　貴信における再反論については、幹事会から分科会にお伝えします。

分科会では、「報告」は積み重ねられたデータに則って妥当性が高いと専門研究者によって広く合意されている知見をまとめたものであることを前提としつつ、先の質問・要望について十分に参考にさせていただきたいと既に回答しています。分科会への本信の転送に当たっては、今回の質問・要望についても、先の質問・要望と同様に参考にしてほしい旨、申し添えます。